

まもなく半世紀を迎える日本・メキシコ交換留学制度

所 康弘

はじめに

今年もまた、大勢の若い世代が日本からメキシコへ旅立つ時期がやってきた。渡航するのは、47 期生の日本・メキシコ（以下 日墨）交換留学生たちである。

ひろく知られるように両国には 1971 年から現在まで、きわめてユニークな国費留学制度が存在する。「日墨研修生・学生等交流計画」の名称で開始されたこの国家的事業は、2010 年に「日墨戦略的グローバル・パートナーシップ研修計画」と改称され、制度内容に変更が加えられたものの、いままも継続中である。

「計画」の最大の眼目は、その互惠性にある。メキシコから日本へ留学生を派遣し、その予算分は日本側が負担する。そして同じ数の留学生を今度は逆に日本からメキシコへ派遣し、それについてはメキシコ側が負担し合う交換（INTERCAMBIO）制度になっている。

研修期間は約 1 年間で、延長はできない。各人の水準や目的に合わせて語学学校で基礎から専門的なスペイン語に至るまでの語学習得に努め、そのうえで大学や大学院などで専門講義を自由に受講することができる。この柔軟な制度設計こそ、「計画」の最大の長所といえる。

当初は双方 100 名ずつが毎年派遣されていたが、その後一時は 22 名（日本側実績）まで減少したり、メキシコ大地震（1985 年）の影響で翌年の派遣が中止になったりと、長い歴史の風雪のなかで紆余曲折を経験してきた。近年は毎年 45～50 名（同上実績）で推移し、今年 8 月に 47 期生の派遣が完了した時点で、行き来した研修生の総数は 4,800 名を超える見通しである。



1971 年 6 月 4 日、ロス・ピノスにある大統領官邸にて。到着したばかりの 1 期生と挨拶するエチェベリア大統領（一番左）。林屋永吉氏は左から 4 人目（『AGUILLA Y SOL』第 3 号より転載）

“INTERCAMBIO” の来し方

少し歴史を振りかえってみよう。遡ること約半世紀。当時、在メキシコ日本大使館付属日本文化センター所長であった林屋永吉氏（その後、ボリビア、スペイン大使を歴任）が、時の内務大臣ルイス・エチェベリア氏の私邸を訪問したことが発端であった。

大の親日家であったエチェベリア氏はすでに次期大統領の座が決まっていた、新しい外交政策の目玉として日本との関係強化を考えていた。その一つの手段としてもちあがったのが、両国の人物交流であり、それも若い世代の青年交流を図ることであった。

とりわけメキシコ側には若い技術者を日本に送り、目覚ましい戦後復興と経済発展を遂げている彼の国の勤勉性や技術を学んできてほしいという想いもあった。これが出発点となり、その後、外交官である林屋氏が実現のため関係部署や機関との橋渡し役を担った。

ことの経緯については、インタビュー「林屋大使、日墨交流計画を語る」（日墨交流会会報『AGUILLA Y SOL』第 3 号、1996 年）に詳しく紹介されている。同大統領の提案を受け、実現にむけて日本側が官民一体になって相当無理をしたことが率直に語られている。同氏は「このような大規模かつ長期間にわたる 2 国間の青年交流が、話が始まってからわずか 9 か月で実現したということは全く奇跡に近いことだ」と述懐している。並々ならぬご苦労があったことが伺える。

そのおかげもあって、ついにその日がきた。「1971 年 6 月 3 日、日本人研修生 100 名を乗せた JAL の特別機がメキシコ市に到着した。その光景を見て涙がとめどもなく出てきたのが忘れられない」（同上インタビュー）。未だメキシコに JAL の定期便が飛ぶようになるより遙か以前で、この時代の両国はまだ互いに近い存在とはいえない難かった。

国際空港には大勢の出迎え者がおり、そこには林屋氏もおられた。翌日、大統領官邸にて研修生全員でエチェベリア大統領に謁見し、一人ひとり大統領夫妻と言葉を交わした。メキシコ側の大歓迎ぶりが目に浮かぶエピソードである。

“INTERCAMBIO”の成果

あれから48年。留学の成果はいかなるものだったのか。この場合の「成果」とは、その定義も含めてなかなか一言では言い表せない。元留学生の内面への効果や社会に対する還元など、多角的観点から総合的な考察が必要となってくるからである。

たとえば1期生の高山智博氏（現職は上智大学名誉教授）の調べによれば、研修生のなかには大企業・一流企業の取締役、官庁の局長、衆議院議員になった者、学会関係では人類学世界協議会の代表幹事や日本ラテンアメリカ学会の理事長に就任した者がいるという。

また、日本の各大学のスペイン語やラテンアメリカに関する科目は、現在も多くの元留学生が教員として担当している。さらに各国でビジネスマン・駐在員や外交官として活躍している例にも枚挙に暇がない。芸術・音楽分野では滞在経験から着想を得た作品を数多く発表し、現代美術の有名な賞を受賞した美術作家もいる。メキシコの大学で教員をしている者も何人も輩出している。



LA PRIMERA avanzada de estudiantes japoneses que ayer arribó a México en un vuelo especial de Japan Airlines. Este numeroso grupo viene becado por el Consejo Nacional de Ciencia y Tecnología conforme al convenio de intercambio concertado por los gobiernos de México y Japón. (Foto Luis Zendejas).

Becados Para Estudiar en México Llegaron 99 Jóvenes Japoneses

De acuerdo con el convenio de intercambio cultural concertado por los gobiernos de México y Japón, ayer arribaron a esta capital en un vuelo especial de Japan Airlines, 99 estudiantes japoneses de ambos sexos becados por el Consejo Nacional de Ciencia y Tecnología.

Estos 99 estudiantes —21 mujeres— fueron seleccionados después de un riguroso examen en el Ministerio de Educación Pública, y en el Ministerio de Asuntos Extranjeros de Japón. Cuarenta y nueve de ellos provienen de diversas universidades, y los otros 50 son recién ingresados a diversas entidades japonesas, al terminar su carrera universitaria.

Electrónica, industria eléctrica, telecomunicaciones, tecnología de alimentos, pesca, educación audiovisual, e ingeniería portuaria, son las principales ramas de especialización que se han fijado de común acuerdo entre los gobiernos de México y Japón. Los jóvenes nipones se especializarán en sus técnicas en el terreno de la práctica, para obtener la tecnología necesaria para su desenvolvimiento profesional al regreso a su país.

Después de una estancia en México para

de la cultura mexicana, que concluirá el 30 de junio.

DISTRIBUCION DE LOS BECARIOS

Los becarios quedarán distribuidos para sus estudios así: 11 en el Colegio de México; 26, a la UNAM; 4, al Instituto Nacional de Antropología e Historia; 3, al Centro Internacional de Mejoramiento del Maíz y Trigo; 1 a la Nacional Financiera; 15 a la Universidad de Veracruz; 9, a la de Oaxaca; 15 a la de Guanajuato y 15 a la de Guadalajara. Seguirán estos cursos: Historia de México y Latinoamérica, Geografía de México y Latinoamérica, Economía Mexicana y Latinoamericana, Artes Mexicanas, Antropología, Arqueología, Sistemas Financieros Mexicanos y técnicas de cultivo.

HOY VISITARÁN AL PRESIDENTE ECHEVERRÍA

A las 17 horas, los estudiantes japoneses harán una visita al presidente Luis Echeverría, en Los Pinos. La señora María

他方、この研修がその後の人生や精神面にまで及ぼした影響も多大であった。この点に関して、今から15年前に9期生の田中京子氏（現職は名古屋大学教授）は興味深いアンケート調査を実施している（同上『AGUILLA Y SOL』第16号、2004年）。

自由記述欄の各コメントを読んでいるだけで、執筆者（31期生、2003年度派遣）が留学時に感じていたことの記憶がまるで昨日の出来事のように、生き生きと蘇ってくる。調査結果のごく一部だけ紹介したい。第1に「多様性に関する考え」がおおいに変化し、異なる価値観や異文化への寛容性が高まったことを実感した者が大多数であった。第2に家族と過ごす時間や余暇を楽しむメキシコ人の生活や人生観に触れて、日本や日本人を再発見し、多くの者がそれを相対化できるようになった。

こうした「成果」は、留学の後は直接スペイン語やラテンアメリカと関わることなく暮らしていても、各人の生き方の指針や軸となり、行動規範に深く繋がっているものと考えられる。

同調査を読みかえし、ハッとさせられた箇所がある。それは「メキシコの隣で強い影響力をもつアメリカ合衆国の存在を、別の視点から見ることができた」という旨の回答である。たとえば最近の米墨両国関係においても、貿易協定、追加関税、移民問題、国境の壁など様々な問題が頻出している。

ラテンアメリカやメキシコ側から見える「世界」は、日本や欧米側から見えるそれとは大きく異なる。それ自体は当たり前のことかもしれないが、留学を経験したことでメキシコ側の視点を深く内面化することができ、それによって複合的な観点から国際関係を認識する方法、つまりは世界観そのものにまで影響を受けたことが看取できる。



2016年8月21日、成田国際空港にて。44期生、出発前の記念写真（『AGUILLA Y SOL』第37号より転載）。その後、全員無事に翌年8月に帰国。直後の9月、メキシコ中部大地震が発生した。

現地紙「El Sol de México」の記事（1971年6月4日刊）。99名の1期生を乗せた日航便（チャーター機 JAL12号）が飛行場に到着した様子を大々的に報じている（『AGUILLA Y SOL』第10号より転載）。

“INTERCAMBIO”の行く末

執筆者が属する業界（大学）では近年、海外との大学間交流協定の締結や学生・留学生の送り出しと受け入れが盛んに推奨されている。その結果、留学先として非英語圏・非欧米圏の選択肢も徐々に増え、実際にこれらの言語文化圏を選ぶ学生も増加した。その意味で半世紀ほど前から続く「計画」の先見性の高さと多様性への志向にあらためて驚かされる。

2010年から両国の戦略的グローバル・パートナーシップを強化するため、内容が発展的に刷新された。主な変更点は、従来の約1年間の研修コース（長期コース）に加えて、短期コース（約2週間）が設置された。同コースの募集分野には、新たな狙いがよく現れている。昨年度は、知的財産制度、貿易・投資や関税、作物・林業・畜産・水産そして微生物学的遺伝子資源、ゲノム医療、考古学系など、両国が特に「戦略的」と位置づけている分野で募集が行われている。

最後に、最近の応募状況や傾向について触れたい。第1に姉妹都市の推薦枠が増えている。執筆者が派遣された頃は和歌山県（シナロア州と提携）と埼玉県（メキシコ州）の2県からの推薦であったが、近頃は広島県（グアナフアト州）、京都市（グアダハラ市）、さいたま市（トルカ市）からも派遣者が毎年出ている。

第2に日本サッカー協会（JFA）からの推薦者の派遣である。審判員資格を持つ研修生（45期生）の留学報告記を読むと、メキシコリーグ（第3部）の主審担当を務め、上位チーム同士の重要な試合でもホイッスルを吹いた経験が描かれている。勉学に励む一方で、審判員活動においては試合会場まで片道6時間以上車移動したこと、金網と有刺鉄線に囲まれたスタジアムで銃を持つ警察官に警備されながら試合をしたことなどの体験が綴られている（同上『AGUILLA Y SOL』第38号、2018年）。スポーツを通じた新しい研修事例として、興味深い。

第3に通称「一般コース」（長期コースのうちスペイン語・文化コースと専門コースを合わせた一般公募枠）への応募者のここ数年の傾向として、①女性の応募比率が常に高い、②大学生や大学院生以外にも社会人経験を持つ者の応募が増えている、③国際開発、考古学、人類学、言語学など従来から人気のある専攻分野以外にも、最近はトランス・ジェンダー論やフェミニズム論などを専門にする者が散見される。学術面での多様化あるいは学際化が進んでいることが、ここにも反映されている。

おわりに

順調にいけば、記念すべき50期生の募集まであと数年に迫った。半世紀ちかくもこの制度が続いてきたのも、ひとえに外務省中南米局中米カリブ課やメキシコ国家科学技術審議会（CONACYT）ならびに両国大使館など、関係部署・機関のこれまでのご尽力の賜物である。今後さらに60期生、70期生と続くように変わらぬご高配を賜りたい。そのためにわれわれ元交換留学生も微力を尽くすつもりである。

ちなみに1994年に「計画」の同窓生を会員とする「日墨交流会」（Asociación de Ex-Becarios Japoneses en México）が設立されている（HP: <http://www.nichiboku.sakura.ne.jp/>）。会の目的はメキシコの人と文化の素晴らしさを知ること、両国の相互理解を促進し、友好親善に寄与しようというものである。そして、派遣年度をまたがった縦（タテ）の関係を築くための会員相互の親睦を図っている。

すでに一桁期の元研修生・会員の高齢化が進んでいる。幅広い世代を含めて会員同士の「相互交流」を図り、各人が保存する貴重な一次資料や写真、文書、記録や日記、証言などが散逸・消失せずに収集・伝達され、少しでも後世に引き継がれて行くことを切に願うばかりである。

（ところ やすひろ 明治大学准教授。日墨交流会会長）